

## 基礎看護学領域における教授方略の検討に向けた 本学1年次学生の学習に関する実態調査

北田 素子<sup>1)</sup> ・ 根本 敬子<sup>1)</sup> ・ 坂下 貴子<sup>1)</sup>  
星野 聡子<sup>1)</sup> ・ 舟橋由喜子<sup>1)</sup> ・ 飯田加奈恵<sup>1)</sup>

### 【要旨】

本研究は、本学看護学部1年次生を対象に、現在の学習状況を明らかにし、学生のレディネスが現在の学習状況にどのように影響するのか、また、学生の学習状況と成績との関連を分析し、学生の学習に関する特徴に適した教授方略の検討に資することを目的とした。平成26年度4月に入学した看護学部1年生118名を対象とし、自記式質問票を用いた調査を行い、91名を有効回答として分析した。結果、1年次学生の学習に関する特徴として、①入学後も高校時代と同様の学習形態で学習しており、学習習慣が十分確立されていない、②暗記中心の学習方法をとる者が約7割であり、暗記中心の学習方法をとる者ほど試験の点数が低い、③看護職への志向性は課題やレポートをよいものにしようと努力する姿勢と関連することが明らかとなった。その結果、教授活動において、内的動機づけを高めること、学生の主体的学習習慣の確立に向けた取り組みが重要であることが示唆された。

キーワード：看護学生、学習状況、基礎看護、教授方略

### I. はじめに

本学看護学部は開学して4年という歴史の浅い学部である。研究者らは、学生が入学して初めて学ぶ看護の専門科目の基礎看護学領域を担当している。佐竹ら(2008)は、看護学導入時期にある学生は、高校生までの学校生活と大学生生活の差に戸惑い、各科目の位置づけが理解できないまま学習にはいつていることを指摘している。基礎看護学を担当している教員にとって、戸惑いのなかにいる学生に対し、教授活動のなかで、学習への意味づけを行い、いかに看護学生としての学習姿勢を養っていくかは大きな課題であると言える。

教授活動において重要なことは、学習者の特性を把握し、授業展開することである。しかし、村中(2014)も指摘するとおり、学生の背景が多様化しているなか、学生の特性を把握

---

<sup>1)</sup> 城西国際大学看護学部看護学科

することは容易ではない。本学においても多様な背景を持つ学生に、これまで理解を深めるために様々な授業や演習方法を工夫してきたが、思うように知識や技術が習得できない学生がいることも現状である。4年間のなかで研究者らのなかでも学生の特徴はみえてきてはいるものの、これまで、客観的指標として本学の学生の特徴、特に学習に関する特徴は明らかにはされてきておらず、学生の学習に関する特徴を踏まえた上で教授方略を再検討していく必要性を感じた。

学習に影響を与える要素のひとつとしてレディネスがあり、学習者のレディネスには、看護への興味関心、高校時代までの学習習慣などが含まれる。池上（2012）は、看護学生の志望動機が学習態度に影響することを報告しているが、これらレディネスは、とりわけ大学1年次における学習への取り組みと関連することが考えられる。また教授活動において我々は、学生に試験を課し、学生の知識の定着の程度を測っている。すなわち試験は、学生の学習への取り組みの成果のひとつとして評価されることを考えると、学習に関する特徴を理解する上では、学生の現在の学習状況を把握するとともに、学習成果のひとつとしての試験との関連を明らかにし、その結果を教授活動につなげていくことは意義深い。

そこで今回、本学看護学部1年次の学生の現在の学習状況を明らかにするとともに、学生のレディネスと現在の学習状況がどのように関連するのか、また、学生の学習状況と成績との関連を分析し、学習に関する特徴に適した教授方略について検討することを本研究の目的とした。

## II. 研究方法

### 1. 調査対象者

対象は、平成26年度4月に入学した看護学部1年生118名である。

### 2. 調査方法

調査は、研究者が独自に作成した自記式調査票と研究者が担当する基礎看護学方法論Ⅲ（以下、担当科目とする）の成績を用いて行った。調査項目は、看護職への志向の程度、次いで、これまでの学習習慣を知るひとつの指標として高校時代の学習時間、および現在の学習状況などによる調査票を作成した。看護職への志向の程度は「とても強い」から「強くない」の4件法により回答を求めた。高校時代の学習時間は、定期試験に向けての1日平均学習時間と、定期試験期間以外での1日平均学習時間について、「5時間以上」から「30分以内」の5段階で尋ねた。現在の学習状況は、入学後の学習時間、学習方法、授業やレポート・課題への取り組み姿勢について調査した。入学後の学習時間は、定期試験に向けての1日平均学習時間と、定期試験期間以外での1日平均学習時間について、「5時間以上」から「30分以内」の5段階で尋ねた。学習方法は、「暗記中心」から「主体的学習」までの3つの学習方法を提示し、3択より回答を求めた。また、授業やレポート・課題に対する姿勢に関しては、授業への参加意欲やレポート・課題に対する努力の姿勢を「とてもそうだ」から「そうでない」

の4件法により回答を求めた。

調査は、1年次後期末試験を終えた2月に行った。

### 3. 分析方法

学生の学習に関する特徴を、調査項目に対する記述統計により分析した。看護職への志向の程度、高校時代の学習時間がそれぞれ学生の現在の学習状況にどのように関連しているのかに関して、 $\chi^2$ 検定により分析した。現在の学習状況と成績との関連は、t検定により分析した。有意水準は  $p=0.05$  とした。分析においては、回答の欠損がある場合は、欠損を認める調査票を除き分析した。解析ソフトは、JMP11 (SAS Institute Inc, NC, USA) を使用した。

### 4. 倫理的配慮

本研究は、城西国際大学看護学部倫理委員会の承認を得て行った(承認番号 26-09)。対象者には、文書と口頭で本研究の目的と方法を説明し、研究者が担当する科目の期末試験結果を使用すること、さらに連結可能符号化すること、参加は自由意思であること、参加の有無により個人に利益・不利益は全くないこと、同意の後でも申し出によって対象者のデータを削除することを伝えた。調査票の回収は、鍵付き回収ボックスを使用し、研究者が不在の状況下で行った。調査票の回収ボックスへの投函をもって、同意を得たものとした。

## Ⅲ. 結果

118名に調査票を配布し、101名より回答を得た(回収率 85.6%)。101名のうち、調査票の回答に欠損を認めた8名と、該当の期末本試験の受験がなかった2名を除く計91名を分析対象とした。

### 1. 学生の看護職への志向の程度

看護職に従事したいという志向の程度について、将来、看護職に従事したいという気持ちがとてもつよいと回答した者は53名(58.2%)、まずまずつよいと回答した者は、30名(33.0%)であり、8名(8.8%)があまりつよくない、もしくはつよくないと回答した(図1)。

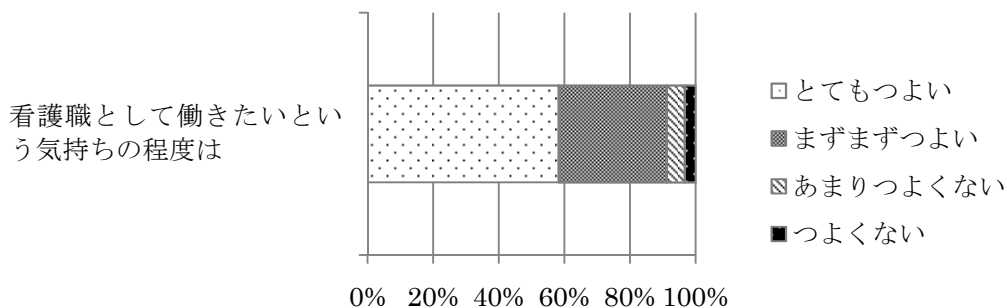


図1 看護職への志向の程度

## 2. 高校時代の学習時間

学習時間に関して、高校時代の日頃の1日平均学習時間は30分以内の者が最も多く43名(47.3%)であり、1時間以内の者は全体の約7割であった(図2)。試験前になると、48名(52.7%)が2-5時間学習しており、次いで、20名(22.0%)は1~2時間の学習時間であった(図3)。

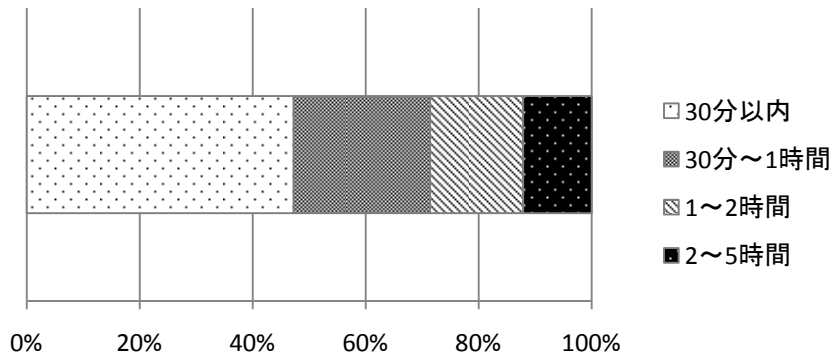


図2 高校時代の平日の学習時間

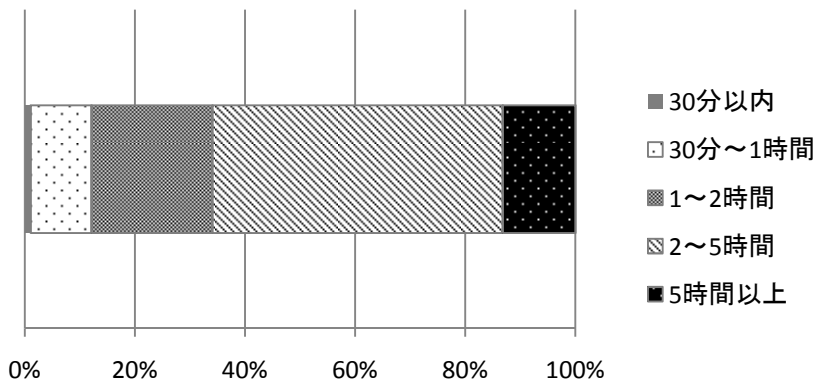


図3 高校時代の定期試験に向けた学習時間

## 3. 現在の学習状況

入学後の平日の1日平均学習時間が1時間以内の者は、約7割であった(図4)。試験前になると、46名(50.5%)が2-5時間学習しており、次いで、28名(30.8%)が5時間以上学習していると回答した(図5)。学習方法では、暗記中心に学習を進めると回答した者が65名(71.4%)であり、分からないところは積極的に自分で調べ、学習を進めると回答した者は25名(27.5%)、興味・関心事にも自主的に学習を進めると回答した者は1名(1.1%)に

留まった (図 6)。授業は意欲的に参加しているか、の問いに関し、とてもそうだと回答した者は 23 名 (25.3%)、まずまずそうだと回答した者は 62 名 (68.1%) であった (図 7)。レポートや課題に対する姿勢のなかで、少しでも良いものにしよう努力しているか、の問いに関し、とてもそうだと回答した者は 37 名 (40.7%)、まずまずそうだと回答した者は 52 名 (57.1%) であった (図 7)。

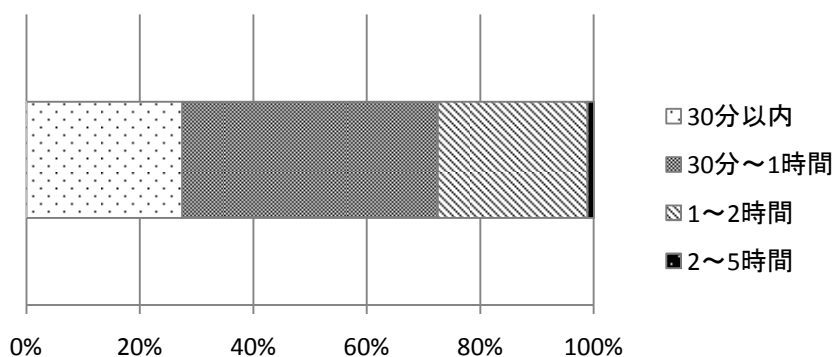


図 4 入学後の平日の学習時間

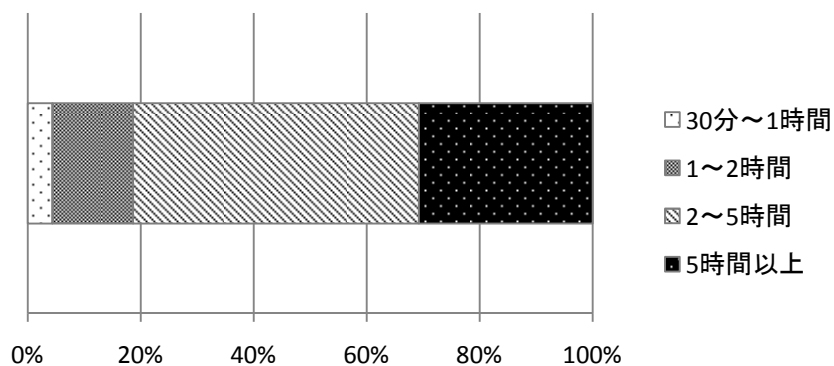


図 5 入学後の定期試験以外に向けた学習時間

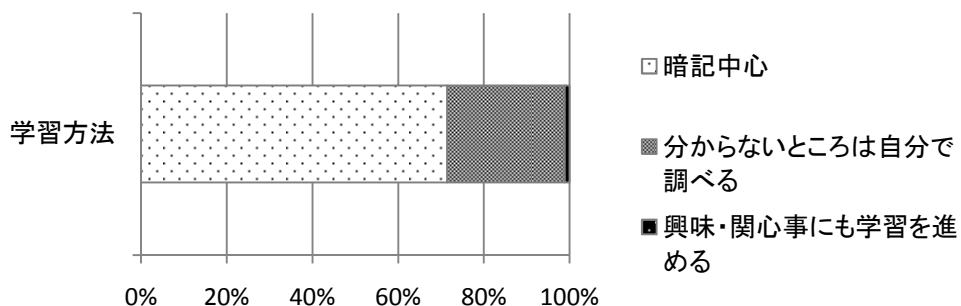


図6 日ごろの学習方法

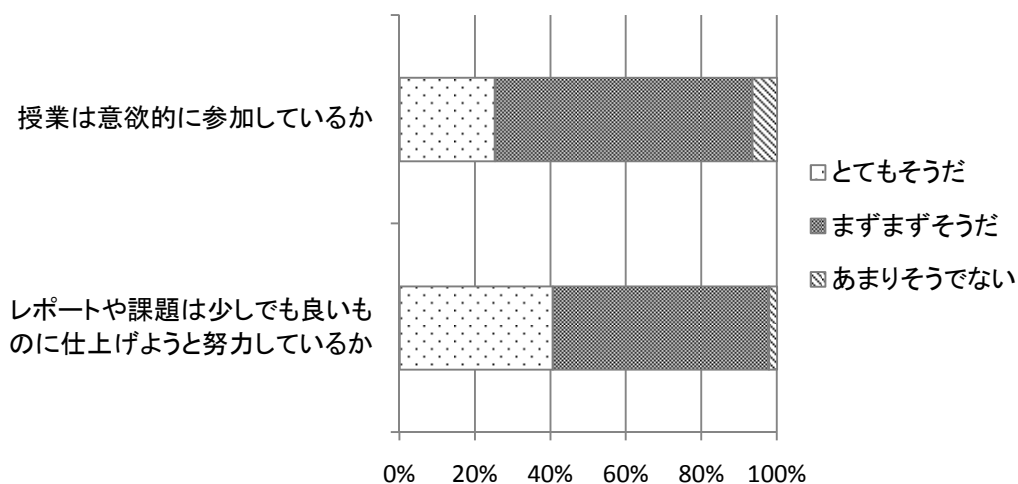


図7 授業への参加姿勢、レポートや課題に対する姿勢

#### 4. 現在の学習状況と看護職への志向の程度、高校時代の学習時間との関連

現在の学習状況と看護職への志向の程度、高校時代の学習時間との関連を  $\chi^2$  検定により調査した。

##### (1) 現在の学生の学習状況と看護職への志向の程度との関連

レポートや課題を少しでも良いものにしようと、とても努力していると回答した者の約7割は看護職の志向もとても強いと回答し、一方、レポートや課題への努力をあまりしないと回答した者は全員、看護職の志向があまり強くない、もしくは強くないと回答していた(表1)。志向の程度を、とても強い、もしくはまずまず強いと回答した群、およびあまり強くない、強くないと回答した群の2群に分け、2群間におけるレポート・課題への努力の程度を  $\chi^2$  検定にて調べたところ、志向の程度によって、レポート・課題への姿勢は有

意に異なっていた ( $\chi^2=24.8$ , 自由度 2,  $p<.001$ )。

大学での学習時間、学習方法、授業に対する姿勢は看護職への志向の程度といずれも関連がみられなかった。

表 1 レポート・課題に対する姿勢と看護職への志向の程度との関連

	レポート・課題への姿勢		
	とても努力	まずまず	あまり
	(n=37) n(%)	(n=52) n(%)	(n=2) n(%)
志向の程度			
とてもつよい	25(67.6)	28(53.9)	0 (0.0)
まずまずつよい	12(32.4)	18(34.6)	0 (0.0)
あまりつよくない	0 (0.0)	4 (7.7)	1(50.0)
つよくない	0 (0.0)	2 (3.9)	1(50.0)

## (2) 現在の学習状況と高校時代の学習時間との関連

大学において定期試験に向け 5 時間以上学習すると回答した者の約 8 割が、高校時代において 2-5 時間もしくは 5 時間以上学習していた。一方、大学での定期試験に向けた学習時間が 30 分-1 時間以内の者は全員、高校における学習時間が 30 分-1 時間以内もしくは 1-2 時間であった (表 2)。高校時代の定期試験に向けての学習時間は、大学での学習時間と関連していた ( $\chi^2=27.9$ , 自由度 12,  $.01<p<.001$ )。大学と高校における平日の学習時間の関連では、入学後の平日の学習時間が 2-5 時間の者は、高校においても同様の時間学習していたが、大学において平日の学習時間が 30 分~1 時間以内の者、および 30 分未満の者の約 7~8 割は、高校においても同様の学習時間であった (表 3)。高校時代の平日の学習時間は大学での学習時間と関連がみられた ( $\chi^2=26.3$ , 自由度 9,  $.01<p<.001$ )。

学習方法、授業やレポート・課題に対する姿勢は高校時代の学習時間と関連がみられなかった。

表 2 大学と高校での定期試験に向けた学習時間の関連 (N=91)

	大学					p値
	5時間以上 (n=28) n(%)	2~5時間 (n=46) n(%)	1~2時間 (n=13) n(%)	30分~1時間 (n=4) n(%)	30分以内 (n=0) n(%)	
<b>高校</b>						
5時間以上	8(28.6)	3 (6.5)	1 (7.7)	0 (0.0)	0(0.0)	.0057
2~5時間	14(50.0)	29(63.0)	5(38.5)	0 (0.0)	0(0.0)	
1~2時間	4(14.3)	11(23.9)	3(23.1)	2(50.0)	0(0.0)	
30分~1時間	1 (3.6)	3 (6.5)	4(30.8)	2(50.0)	0(0.0)	
30分以内	1 (3.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0(0.0)	

χ<sup>2</sup>検定

表 3 大学と高校での平日の学習時間の関連 (N=91)

	大学					p値
	5時間以上 (n=0) n(%)	2~5時間 (n=1) n(%)	1~2時間 (n=24) n(%)	30分~1時間 (n=41) n(%)	30分以内 (n=25) n(%)	
<b>高校</b>						
5時間以上	0(0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	.0018
2~5時間	0(0.0)	1(100.0)	4(16.7)	5(12.2)	1 (4.0)	
1~2時間	0(0.0)	0 (0.0)	8(33.3)	6(14.6)	1 (4.0)	
30分~1時間	0(0.0)	0 (0.0)	8(33.3)	10(24.4)	4(16.0)	
30分以内	0(0.0)	0 (0.0)	4(16.7)	20(48.8)	19(76.0)	

χ<sup>2</sup>検定

## 5. 現在の学習状況と試験結果との関連

担当科目の試験の点数に関して、80点以上は12名(13.2%)、60~79点が61名(67.0%)、60点以下が18名(19.8%)であった。全体の平均点数は、67.2±10.9(SD)点であった。現在の学生の学習状況と成績との関連をt検定にて比較したところ、大学での学習時間、授業やレポート・課題に対する姿勢はいずれも成績と関連がみられなかった。学習方法を、暗記中心とそれ以外の学習方法で2分し、学習方法別に期末試験の点数をt検定にて比較した。暗記中心の学習習慣がある群での平均点が65.5±10.9(SD)であったのに対し、主体的に学習を進める習慣がある群では、71.2±9.8(SD)であり、暗記中心の学習習慣がある群は主体的に学習を進める習慣がある群と比較し、点数が有意に低かった(p<.05)。



## IV. 考 察

### 1. 対象となった1年次生の学習に関する特徴

#### (1) 高校時代の学習時間からみた特徴

今回の調査において、学生の高校時代の平日の平均学習時間は、1時間以内の者が全体の約7割であり、うち約5割は学習時間が30分以内であった。高校2年生を対象とした学校外における平日の学習時間の調査（Benesse 教育研究開発センター，2006）によると、偏差値40-55の生徒の平均学習時間は1時間と報告されている。つまり、約7割の学生の学習時間は、高校時代に全国平均学習時間を下回っており、日頃学習する習慣が十分培われていない、または培われていない状態で入学していることが明らかとなった。また、高校時代の学習時間は、大学での学習時間と関連しており、とりわけ高校での学習時間が少ない者は、大学においても十分学習できていないことが明らかとなった。このことから、大学の1年次において、学習習慣を確立させていく必要があると考えられる。

#### (2) 学習方法からみた特徴

学習方法から学生の特徴を見ると、7割の学生が暗記中心の学習方法をとっていた。普段の学習時間が1時間以内という結果からみても、暗記中心の学習方法に偏らざるを得ないことが推測される。特に試験点数が低い学生にこの特徴がみられたことは、基礎学力が備わっていないことも考えられる。学習は、知識を覚えることからスタートするが、その覚える過程で分からないこと、疑問なことを調べることで理解が深まり、基礎学力が備わっていく。学生が今後学習を継続していく上で、自ら調べ、学習できる力の育成が求められる。

#### (3) 看護職の志向の程度からみた特徴

看護職への志向の程度は、大学での学習時間、学習方法、授業に対する姿勢といずれも関連がみられず、レポート・課題に対する姿勢とのみ関連していた。このことから、少なくとも1年次においては、入学後の学習時間、学習方法は高校時代の学習習慣による影響が大きいことが考えられる。一方で、高校時代と比較し、大学での学習においてより特徴的なレポート・課題において、志向の程度と関連がみられたことは注目すべきである。レポート・課題への取り組みにおいては、学生は、自ら必要な情報を収集し、情報と情報を関連させ、自らの考えを織り交ぜながら思考していく過程が求められる。すなわち、レポートや課題がより主体的な学習に基づくべきことを考えると、志向の程度は、学生の主体的な学習態度と関連していくものと考えられる。

今回の調査において本学に入学した学生のうち、看護職に従事したいという気持ちがあってもつよいと回答した者は約6割、まずまずつよいと回答した者は約3割、あまり強くない・強くないと回答した者は約1割であった。上述のように志向の程度が学生の主体的な学習態度と関連していく可能性を考えると、学生の看護職への志向の程度が様々である現

状のなかで、入学後早期にいかにも、動機づけを高めていけるかが問われると考える。

## 2. 教授活動への示唆

### (1) 内的動機づけ

村中（1998）は、女性の社会進出の一般化、看護婦等養成施設の大学化が促進され、看護学校に入学してくる学生たちの入学動機は多様化し、一概に看護婦（士）への志向は強いとは言えない、それゆえ、入学後には授業を通して内発的動機づけが高められ、学生自ら幅広く看護職を志向していくことに結びつくような教育実践が重要である、と述べている。

今回の調査において、看護職に従事したいという気持ちがとてもつよいと回答した者は約6割であったが、まずまずつよいと回答した者は約3割、あまり強くない・強くないと回答した者も約1割いた。とりわけ、志向の程度がまずまずつよい、あまり強くない・強くないと回答した約4割の学生に対して、入学後最初の看護専門分野において、動機づけを高めていくことは、学生の今後の学習姿勢、将来のキャリアへとつながるものと考えられる。

五十嵐（2015）は授業を基盤とした教員による学びと実践の結びつきの支援の必要性を指摘しているが、大学での授業（講義・演習）で修得した知識や技術が、実際の臨床の場で活かされるという経験は、学生にとって学習への動機づけ・意欲に大きく結びつくものと考えられる。大学においては、より看護の現場がイメージでき、臨床の場での実践につながるように教授方法を工夫し、実習においては、学生のもつ知識・技術を引き出しながら臨床の場で活かせるように導いていくことが大切であると考えられる。そして、学生の実習での経験を教材化し、実習後は大学での授業に活かすなど、大学と臨床をつなぐ継続した関わりが学生の学習への動機づけ・意欲の向上と継続に効果をもたらすのではないかと考える。

本学基礎看護学領域では、早期体験学習による動機づけへの効果（田口，2011；巽，2009）を期待し、7月に模擬患者とのコミュニケーション演習、12月に基礎看護学実習Ⅰを組み込んでいる。今後はこれらひとつひとつの体験の効果をつなげ、継続性ある教育を実践していきたい。

### (2) 学習習慣の確立

入学後早期にいかに学習習慣が培われていくかが重要になってくる。佐竹ら（2008）は看護学導入時期にある学生が、各科目の位置づけを理解できないまま学習にはいつていることを指摘している。1年次生は、各科目の位置づけが曖昧ななか、学習への意味を十分に感じ出せず、そのことが学習習慣確立の最初の障壁となる可能性が推測される。研究者らが担当している科目のなかで、1年次における医学の専門科目（人体の構造機能や病原微生物学など）が看護のアセスメント能力、日常生活援助や感染予防などの看護技術に関連することを示すなど科目間の関連性を示しながら、学生の学ぶことへの理解を促すことが先駆だと考える。

### (3) 自ら調べ、学習できる力の育成

分からないところを自ら調べ学習を進めていくためには、まず自身の分からないところが分かる、続いて、分からないところを調べる方法を知っており、それを基に解決ができることが必要となる。資料や情報から意味ある情報を見つけ出すこと、要約することは、学生の基礎学力を高めることが予測され、それは、学生がある資料、情報に直面した際に、その内容を理解し、同時に、理解できないところに気づく力につながるのではないかと考える。また、小グループでの学習を通し、自分の意見を述べ相手の意見を聞き統合することで自分の考えを整理させ、自分の分からないことに気づかせるようなワークシートの開発も一つの方法と考える。そして、学生が分からないことを調べたことの成果を感じられるような取り組みが重要だと考える。

## V. まとめ

今回の調査の結果、平成26年度4月に入学した看護学部1年生の学習に関する特徴として、①入学後も高校時代と同様の学習形態で学習しており、学習習慣が十分確立されていない、②約7割の学生は暗記中心の学習方法をとっている、③暗記中心の学習方法をとる者ほど、試験の点数が低い、④看護職への志向性が強いほど、課題やレポートをよいものにしようと努力する姿勢が強いことが明らかとなった。これらの結果から、教授活動において、内的動機づけを高めるとともに、学生の主体的学習習慣の確立に向けた取り組みが重要であることが示唆された。今後、今回得られた教授活動への示唆を基に、授業設計、授業展開を行い、学生の学習活動に対する効果を評価していきたい。

## 文 献

五十嵐ゆかり (2015). 看護の授業をおもしろくするには「結びつき」が見えるようにデザインする. 看護教育, 56 (6), 496-502.

池上真由美, 中桐佐智子, 岡本陽子 (2014). 看護学生の志望動機や満足感が学習態度に及ぼす影響. インターナショナル Nursing Care Research, 11 (1), 143-153.

佐竹澄子, 大久保暢子, 菱沼典子, 佐居由美 (2008). 看護学導入時期の学生が感じる困難性の検討. 日本看護科学学会学術集会講演集, 28, 272.

田口忠緒, 野田幸裕, 岡本光美, 鍋島俊隆 (2011). 名城大学薬学部における早期体験学習の学習動機付けおよび将来の進路設計に対する効果の検証. 医療薬学, 37 (4), 233-240.

巽康彰, 恒川由巳, 浦野公彦, 上井優一, 服部亜衣, 長田孝司, 岩本喜久生 (2009). 早期体験学習が薬学部2年次生の学習効果およびモチベーションに及ぼす影響. 愛知学院大学薬学会誌, 2, 15-19.

Benesse 教育研究開発センター (2006). 第4回 学習基本調査.

[http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/kou\\_databook/2013/pdf/P34-51.pdf](http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/kou_databook/2013/pdf/P34-51.pdf), July 1, 2015.

村中陽子 (2014). 学習支援システムとしての教授方略を考える. 日本看護学教育学会誌, 19.

村中陽子 (1998). モチベーションを高める看護 CAI. *Quality nursing*, 4 (4), 337-343.